城東中学校だより

【カラー版を、ホームページに掲載しています】

NO.17　2023.2.9

発行者　城東中学校長

TEL　26－7022

城東中学校・人権の集いを開催しました！

２月４日（土）の午前に、例年この時期に実施しています「人権の集い」を開催しました。内容は、第一部として、講師に三重テレビ放送報道制作局長の小川秀幸さんをお招きして、「ハンセン病回復者との出会い～私たちにできること～」と題した講演をしていただきました。

小川さんは、三重テレビ放送において、2001年のらい予防法違憲国家賠償請求訴訟の判決を機に、ハンセン病問題の取材をはじめ、元三重県職員とハンセン病回復者との交流、回復者の里帰り、ハンセン病と家族などをテーマに10本のドキュメンタリーを制作されました。その結果として、放送文化の向上に貢献した作品に贈られるギャラクシー賞において、2014年度に報道活動部門優秀賞、2016年度に「大ちゃんと為さん～あるまちの風景～」でテレビ部門選奨にそれぞれ選ばれ、日本民間放送連盟賞でも、2015年度に特別表彰部門放送と公共性優秀を受賞されています。20年間ハンセン病の取材に携わってこられた中で、ハンセン病回復者の方をはじめ、多くの方々との出会いや繋がりから、感じられた思いや、ハンセン病回復者の方や家族の思いを、制作された「大ちゃんと為さん～あるまちの風景～」の作品も紹介していただく中で、伝えていただきました。

【保護者・地域の皆様の感想】

○恥ずかしい話ですが、初めてハンセン病の話を聴かせていただきました。とても心に染みる話でした。やはり正しく知る、正しく学ぶことが大切だと思いました。私は、コロナにかかったことでメンタルがやられました。これはきっと私のなかにも、少なからず差別をしてしまうところがあったからだと思います。「差別をする側の人が変わらないといけない」、本当にそのとおりです。

○「人間回復」という言葉は、周りの側・社会の側が考え、回復しなければならないことだと思います。このことは、あらゆる差別問題の解決において共通することだと思います。同じ間違いを繰り返さないためにも、正しいことを知り、自分自身を見つめ直し続けることが大切だと思います。生徒たちの力強いメッセージの発信が、心にグッときました。差別をなくそうとする熱い気もちに私も負けていられないなと思いました。

○小川さんのお話から、「なくなって消えてしまうのではなく、同じ過ちを繰り返さないために伝えていくことの大切さ」を教えていただきました。学習していくことの大切さを改めて学ぶことができました。

○今までハンセン病について知る機会がなく、今日講演を聴いて、長く辛い思いをしながら、今なお、亡くなってからも故郷に帰れない人がいたことを知りました。法律によって療養所に送られ、家族や故郷のことを思いながら人生を送った人の悲しみは想像することしかできませんが、ただ、自分の運命だと思い受け入れて生きていくことしかできなかったのだろうと思います。このような差別を二度と繰り返してはいけないと感じました。生徒さんの発表で、「社会は変化する」「人権の学びを止めてはいけない」という意見が、本当にそのとおりだと思いました。中学生でこのような意見を言えること、人権学習をしっかり学んでいるのだなぁと感じました。

第二部は、校内で行っている人権サークル「城東のつどい」の活動報告と、伊賀市の「部落問題を考える中学生の集い」に参加した生徒からの報告がありました。「城東のつどい」では毎月１回月曜日の放課後に活動している内容や、地域の皆さんにご協力いただいた熊本地震支援バザーの活動について、収益金を南阿蘇中学校に贈らせていただき、その後ZOOMで交流したこと等、活動の中身や感じたことを発表しました。

「部落問題を考える中学生の集い」参加者２名からの報告

◎私は、「伊賀市・部落問題を考える中学生の集い」の実行委員会に参加しました。実行委員会では、伊賀市の中学校10校から集まり、部落問題をはじめとする様々な人権課題を解決していくために、合計5回の話し合いを重ねました。初めて会う人たちに意見を伝えるというのは、すごく緊張しました。だけど、周りのみんなは私が話し終わった後に、拍手などで反応を返してくれたのですごく安心しました。みんなは積極的に意見を出していてすごいと思ったし、このなかまと一緒に差別をなくす方法を考えて学校に発信し、差別をなくしたいと思いました。話し合いでは、それぞれの中学校の人権学習で学んだことを交流しました。学習した内容は違っていたりしたけれど、全てのことはつながっているのではないかと思いました。様々な人権課題で今、不安な思いをしている人がいるという事実、それを知っていかないと差別はなくならないということを確認しました。

部落差別については、今までにたくさん勉強してきたので、自分も周りの友だちも「部落差別を許さない」という思いがあると思います。でも、自分も周りの友だちも、「自分には関係ない」「どこか遠い世界の話」という思いが、他の人権問題より強くあるのではないでしょうか。しかし、「高校に行ったとき、差別されないか不安もある」という思いを聞いて、差別は「昔の話」でも「遠い世界の話」でもなく、「今も身近にある」という事を実感しました。不安に思っている人がいるということは、絶対になくしていかなければいけないと強く思いました。だから、私はこのことを多くの人に知ってもらいたいと思いました。どの差別も、元々は人間の勝手な考えが生んだものだから、人間の力でなくすことができると思います。そのためには、人権学習で知っていくこと、行動に移すことが大切です。私は、これからも人権課題について学び続けて、「誰もの生きやすさが平等に」与えられる、差別の無い世界の実現を実行していきたいです。

◎私は、3年生で行った「なかま集会」の実行委員を務めました。なかま集会では、部落問題を考える中学生の集い・実行委員会からの報告を受け、その報告をもとに、グループで話し合いを深めていきました。私は、小学生の集いや城東のつどいに参加していく中で、人権学習が楽しいと思えるようになってきました。今回、中学生の集いの報告を聞いて、決して「誰かの問題ではない」という思いを強くもちました。なかま集会で、差別をなくしていくためにどう行動していけばよいのかを、みんなで考えていきたいと思いました。なかま集会は、誰かの意見に感想を返したり、頷いたりして、みんなが「自分の問題」という雰囲気で話し合いが進んでいきました。それぞれの意見を出し合って内容も深めることができました。もっとみんなと話したい、もっとみんなの意見を聞きたいと思える集会となり、この集会で、「なかま」を実感することができました。

私は、差別をなくすために、これからも人権学習を続けていきたいです。一度話を聞いても忘れてしまったりすることもあるし、話を聞く度に新しい発見もあります。また、社会が変化していったりもするので、人権学習は本当に「学ぶことを止めてはいけないもの」だと思います。差別をなくしていくためにまずできることは、無意識のうちにある自分の中の偏見や差別意識に気づいて、そのことを認めていくことだと考えます。そして、それを少しずつなくしたり、変えたりできるように人権学習を続けていきたいです。また、差別をなくすなかまとつながっていくために、周りの人との関係を大切にしていきたいです。一人で行動するのは難しいから、困ったときに助け合えたり、思ったことを言えたりするなかまが大切だと思います。だから、友達一人一人を大切にして、自分も大切に思ってもらえる関係を築いて、ただの友達じゃなくて、なかまになっていけるようにしたいです。そのために、日頃からいろんな友達と話したり、人の気持ちを考えて行動していきたいです。